

奥村知世（令和六年七月号）

ボックス席に他人四人を座らせて京成線が郊外へ行く

原色のゴルフウェアが二十人集まり始まる事業部コンペ

始球式皆に見られて迷いなく打ち抜く事業部長の背筋はいきん

レディステイその先さらにシニアティーピンクや銀の目印光る

昼食のビールのサイズを競い合う男ら大ジョッキ、メガジョッキ

トンテキは分厚く切られさあこれ食って打つぞと脂身も食う

十八回ボールを穴に入れたあと風呂に入ってビールを飲んで



●作者の言葉

ゴルフはレディステイーから回らせてもらっている。

仕事で言えば、私より上の世代の先輩は「女性である

うとレギュラーティーから」

だっただろう。我々の世代は「女性はレディステイーで

どうぞ」となった。ゴルフ場では、最近「シニアティー」

も多く、もつと言えば（性別や年齢ではなく）「ドライバーの飛距離でティーを選んでください」という表示になっていることも多い。仕事や社会もそうなっていくような気がする。黒岩剛仁先生、いつも見守ってくださりありがとうございます。

●選者の言葉

昨年七月号〜本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計三七人。この一年は、複数回選んだ人が多かった。三回選んだのが、奥村知世、金有美のお二人。他に、大塚亜希、西村三智、諏訪花、口笛浦、東由美、篠田和香子、門田祥子作を二度選ぶという珍しい年だった。八、九月号で乗馬体験と動物たちを詠んだ諏訪作、一月号の金作の家守や門田作の教師になられた娘さんなどが印象に残っている。

そんな中で、三度選んだ奥村作が傑出していた。三月号の離婚と夫婦別姓をテーマにした社会詠も捨て難かったが、最終的には、職場ゴルフにまつわる七月号、四月号のいづれかを選択することとなり、前者を年間選者賞とした。

高鸞石

（令和七年二月号）

その夢に花の平野を描きつつ冬の畑に眠る白鳥

羅馬人の『自省録』読む窓辺よりしばしば朝の吹雪を確かむ

やわらかき焔に薪を投げ入れて音たつころの冬鳥の声

俊太郎死す 薄日の宿の鉄鍋に北海縞蝦煮られるばかり

直立の者ばかりなり馬鈴薯の黒き畑は夕陽を耐えて

刃にてバター圧し切るくらやみの乳の香にこそ懐かしき過去

煙たつ硫黄山アトサヌプリに夜はきて地理すさまじき北国の果はて



●作者の言葉

受賞作品はオホーツク海に面した道東の小さな町で暮らしていたときに詠んだものである。オホーツクの風土に触

れて、自然とは、自分とは、生きるとは何かに悩み、「辺境」という概念に至った。すでに歌壇で活躍している、都会的な歌を詠む知り合いの若

い歌人たちとは違うものを詠める、という確信を得た。だが自分は、その確信をすら疑った。確信は、人間を越える存在と幻想性と生活と過酷さと清潔さが混然一体となった「辺境」を、歌として残すことができ、はじめて本物になるだろう。

●選者の言葉

高鸞石さんの作品には、北海道の風土が印象的に詠まれている。実景から詩的なイメージがひろがる点も魅力だ。

三首目では「やわらかき焔」から、自由自在に形を変える暖かそうな焔が見える。そこに「薪を投げ入れ」る行動が入り、薪のはぜる音と「冬鳥の声」で聴覚へと転じる。鳥の鳴き声がうたわれることで、寒い戸外と室内との対比が生まれている。五首目は重厚な油絵のようだ。「黒き畑」「夕陽を耐えて」の重苦しさが厳しい自然を思わせる。ゴッホの「馬鈴薯を食べる人々」という絵の暗さも重なるような気がした。六首目は冷えたバターを「圧し切る」感覚のリアリティが生きている。独特な迫力のある作風にこれからも注目したいと思う。

雨雨雨汰（令和七年三月号）

ちやぶ台のしけたチップス、カップ麺、缶コーヒーの飲み口に蠅

八日目のドアポストには鮮やかな督促状とピザ屋のチラシ

錆びついたブリキの玩具のロボットは倒れたままで歩き続ける

新聞の拉致の事件を鍋敷きに鍋いっぱいの拉麺を喰う

色褪せたポストカードが壁にありマン・レイの目に西日があたる

東の窓からあらわれる日輪をただ十時間眺めておりぬ



●作者の言葉

この度は年間選者賞を頂き大変光栄に思います。心の花に入会して三年の間、稚拙なパンクロックのように思った

ことを叫んでいるだけの短歌を詠んでいた私でしたが、最近結社の先輩方のアドバイスもあり「叙景歌」の大切さを理解し、私なりの「叙景歌」

とは何かを考えるようになりました。その中で生まれた本作品は何でもない日常の景色を切り取ったもので、嬉しさもひとしおです。これからも更に自分らしさを深く追求し精進したいと思っています。谷岡亜紀先生、本当にありがとうございます。

●選者の言葉

卓上のポテトチップスはすっかりしけっ
ていて、飲みかけの缶コーヒーには蠅がた
かっている。ドアポストには（恐らくサラ
金の）督促状。そしてブリキのロボットは
錆びついている。これが作者が見ている風
景であり、すなわち世界は悪意に満ちてい
る。さらに言えば、作者はその悪意に親和
している。“麗しい”悪意。このパンクな
感覚からは「時計じかけのオレンジ」を思
い出すが、倒れたままで空しく歩き続ける
ロボットの徒労こそが、作者の逆説的な自
恃である。付け加えれば「マン・レイ」に
代表される広範な〈知〉の手触りも、作者
の世界の魅力である。既に前に書いたこと
だが、雨雨雨汰にはぜひ『コインロッカー・
ベイビーズ』を目指してほしい。

佐藤博之（令和七年四月号）

キックオフ高く伸びゆく静謐の果てゆ落ちくるボール、蒼穹
タツクルの音が真冬のスタンドを小さく鋭く熱く駆け抜く
倒れつつ肩を突き出し敵陣の一步を奪ふフォワードの腕
スクラムに踏みしだかれし冬芝の香がスタンドを冷たく過ぎる
屈強と頑強がその概念をゆるがしながらモールを崩す
タツクルをいなされ倒れ立ち上がり走れども走れども敵の背中
展開の短きパスの描き出す折れ線グラフの如き航跡
バックスのパスが北風より疾く^{はや}タッチラインの際へ吹き抜く

●作者の言葉

この度は年間選者賞に選んで下さいまして、大変光栄なことと御礼申し上げます。併せて、いつも歌のことで

以外のことも見守りつつ何かと助けてくれる妻・西村曜にも、この場を借りて感謝申し上げます。
ラグビーは面白いスポーツ

です。選手としての競技経験はありませんが、短歌を通じて何かラグビーに貢献できたとしたら、とても嬉しいです。

●選者の言葉

ラグビーの歌といえば、佐佐木幸綱だ。実際にラグビーを行い、行動する主体を詠んだ歌だ。今回、私が年間選者賞に選んだ佐藤博之の歌は観戦者の歌だが、ただ単に試合を観ているのではなく、五感をフルに使ってラグビーを自らの肉体と一緒になっ
て捉えて詠んでいて出色だ。競技してないからといって、迫力がないのか。否、迫力がある。躍動感に溢れている。パスの軌跡を見る目。タツクルの小さな音を聞き逃さない耳。スクラムに踏みしだかれた冬芝の香を感じ取る鋭敏な鼻。作者ならではの身体感覚と言える。八首それぞれがラグビーならではの場面を生き生きと表現する。

今年もいい作品に出会えた。最初の読者になれて嬉しい。選者冥利に尽きる。



服部崇

（令和七年五月号）

義理チヨコのキットカットに添へらるる心遣ひの五円しみ入る
ミステリー小説を読む週末の午後の基隆^{キールン}雨降りだつた

あの家は燃えてしまつたこの家はらんらんとして咲く花のごとし
探しても辿り着けない夕まぐれ電池の残り僅かとなりて

残された時間にどこへ行きたいか胡椒の効いたスープをすす

台北の二月の寒さべしべしと我が身にしみて明日を案ずる

黒犬が近づいてくるわたくしを恰も認めてくれるかのやうに

台湾のさくらの名所十選の地図を眺めてこころ和まず



●作者の言葉

斎藤佐知子先生、年間選者
賞に選んでいただき、心より
感謝申し上げます。台北の二
月は意外と寒く、ダウンジャ

ケットを着込む日も多くなり
ます。海外の任期は通常三年
間とされるため、この一連を
編んだ頃は、数か月後には日
本への帰任命令を受ける可能

性が高まっている時期に当たります。この
三年間、「台湾歌壇」など台湾の短歌シー
ンに興味を持って過ごしてきましたが、「心
の花」の先人たちの痕跡が台湾に残されて
いることに気づかされました。「心の花」
の奥深さに改めて感じ入っております。

●選者の言葉

服部崇さんは、現在台湾に在住し、政府
機関の公務に就いているという。日本と台
湾には歴史的な葛藤があり、中国とは目下
厳しい緊張関係にある。このような社会状
況のもとでの職場はさぞ息苦しいものであ
ろう。私人の旅行詠であれば、好奇心を刺
激する興味深い展開が期待されるところだ
が、この作品にはそれが無い。作者の作歌
美学なのか、あるいは慎重に避けているの
か。ともあれ一読してすぐにわかるという
作風ではないのだが、読み過ごしにはでき
ない何かがある。心理描写に力があるから
だろう。台湾の都市という異郷に暮らす疎
外感、閉塞感、バナナの実る地でのべしべ
しと身に沁みる寒気、孤独などが深い思い
とともに伝わってくる。

尾上宏

（令和七年五月号）

容赦なく屋根雪落ちて窓を埋めストーブの排気口も塞がり

日一日やまず屋根雪嵩を増す巨大になりて落ちて響めく

軒先に凍り巻きつく屋根雪は重さを増して落雪を阻めり

軒先に溶けて凍りて氷柱となり太き氷柱の陽差しに赫く

三十五年吾を助けし除雪機の深紅の車体90キヨマルキヨデ―9D

三米に聳え立つ壁真つ白な雪の膨らみ処々に残して

灰色の空に向かいて除雪機は雪を砕いて吐き続けおり

●作者の言葉

「今年の除雪はえらいねえ」

と挨拶を交わした二〇二五年

の白馬の冬。「五六豪雪よりえ

らい！」と、伝説の昭和五十六

年の雪を凌ぐ声も飛び交って

いました。そして、宿を始め

て三十五回目の冬が終わった

四月十二日、アッサムの最終

日を迎えました。妻も私も素

人で宿を始めて、苦しいことも楽しいこともたくさんありました。雪は隣人であり、時には異邦人でもありました。そんな「最後の冬」の記念に、年間選者賞を頂けるのは望外の喜びです。本当に、ありがとうございます。

●選者の言葉

選者賞を最終的に決めなければならぬという段階になって、どうしても絞りきれない場面に遭遇することがママある。今年尾上さんと金さん、どちらか決めがたく、偉ぶった言いかたに聞こえると困るが、わたしはお二人のこれまでの作歌態度を非常に好ましいものとして見てきた。おなじ思いの読者は多いと思う。内省の歌を作り続けてきた金さんは、作風が新境地へと進んだ。しなやかで、折れにくい思想を得たのではないかと推測する。

尾上さんも作風を広げた。語ろうとする意識が強くなって、その意識と言葉が調和している。雄渾だったり、はかなく悲しく、優しく、何をどう詠むか。広い世界で詠む楽しみを知ったのではないだろうか。



森川陽子（令和七年六月号）

北欧へ深夜離陸後アラスカの上空再び夕日と出会う

アイスランドを覆う振れる溶岩の大地は真中で裂けているらし

草木無き溶岩大地駆け抜けていきなりドンと地熱発電所

向こう岸見えぬ露天の風呂の池ブルーラグリーン乳白青色

アイスランドの吹雪く海辺に波しぶき浴びつつ三晩オーロラを待つ

橙色の三日月北極圏に落ちオーロラ見ぬまま三夜目過ぎたり



●作者の言葉

昨年から太陽の活動が活発になり、オーロラを見る良い機会的时候了。暖流の影響で、真冬でも最低気温はマイ

ナス三度というアイスランドに、今年の二月行つて来ました。初めてで最後のチャンスと思い、オーロラを待ちましたが現れませんでした。同行

のツアー仲間から、以前に行ったカナダでも駄目だったと聞き、なる程、と妙に納得しました。オーロラを逃した分、せめて短歌にという思いで詠みました。

晋樹隆彦先生、思いがけない賞を、本当に有難うございました。

●選者の言葉

今年は初めて知る名前の方を月々の選歌欄に取り上げたと記憶している。

その中で今年度は筆者もよく存じている森川陽子さんの一連をトップにした。氏は熱海歌会の推進役でもあり、とても熱心な歌詠みである。

六月号だったか既に特選として推した一連が今も記憶に残っている。六首を年間選者賞として推したが、省いた他の二首もリアル。

・オーロラは目に見えずとも写真には撮れると三脚立て挑む人

・飛び立ちて見下ろす氷の島まさに火の島
ホットプレートになりき

北欧は全く未知の国なのに、オーロラや氷の島が目に見えてくる。